いれずみ物語 —16—

小野 友道

カポシといれずみ
— 世界で最も有名ないれずみ男 —

日本皮膚科学会事務局にMoritz Kaposiの真っ白な胸像が置かれている。Kaposiはあのエイズのカポシ肉腫のカポシである。ウィーン大学の主任教授時代に、土肥慶蔵が留学した。土肥は帰国後東大教授となり、日本皮膚科学会を創設した。その縁で2001年、日本皮膚科学会総会の第100回が東京で開催された際、会頭を務めた慶応大学西川武二教授（現名誉教授）のお世話で、ウィーン大学から寄贈されたのが、その胸像である。カポシ肉腫は、エイズ患者に併発することで有名になったが、そもそもは老人に発症し、慢性に経過する多発性の腫瘍に対し、1872年、カポシが“idiopathic multiple pigment sarcoma”として5例を報告したのが最初である。それはエイズとは関係ない腫瘍であった。これが後にKaposi sarcomaカポシ肉腫と呼ばれたのである。現在はヘルペスウイルス8型が原因と見なされるに至った腫瘍である。カポシはその他にも色素性乾皮症、カポシ水痘様発疹症など重要な疾患を発見、その概念を創った超弩級の皮膚科学者である。

そのカポシが、100余年前に皮膚病アトラスを出版した。それは1898～1900年にかけて3巻発刊された“HANDATLAS DER HAUTKRANKHEITEN FÜR STUDIRENDE UND ÄRZTE VON HOFRATH PROFESSOR M. KAPOSI”である。私がこのアトラスにお目にかかったのは6年前、免疫学の泰斗・故尾上 薫先生（前熊本大学免疫学教授）が、小生の部屋を訪ねられ、風呂敷の中から、分厚い本3冊などを示された。「この本、何か役に立たないか。開業していた祖父の本だ。お袋が大事にしていたが、お前に預けるからよしなに」と言われた。それこそがカポシのアトラスだった。3色刷りの見事なアトラスを、毎日倦かずに眺めていたが、そのなかにいれずみの2症例があった。一つは丁髷の褌姿で背中一杯のいれずみで、日本人症例と思われるが、Chinaと説明されている。もう一つが今回の主人公コンスタンティンである。説明に“Birmah, Georgios Constantinos, Vom Autor beschrieben 1872. Wr. med. Wochensch. Nr. 2.”とある。

*

カポシはアトラスの中で、「われわれウィーンの皮膚科病院ではカラーの水彩原本の教材を使用している。それらはHebraにより作られ、

カポシのアトラスに描かれたコンスタンティン

現在1,000枚ある。その大部分はTheile von ElfingerおよびCarl Heitzmannという名人の手になる」と記している。いれずみ男もこのどちらかが描いたはずである。そのうち、Carl Heitzmannを紹介した論文を見つけた。何と、その論文にモノクロであるが同じいれずみ男の絵が掲載されていた。また、アムステルダムの“The Amsterdam Tattoo Museum”の絵はがき集の一枚にも同じいれずみ男コンスタンティンがいた。よく見ると、ほんの少し動物たちの絵が異なるような気がしないでもないが、まずほとんど同一である。さらにドイツ語で書かれたいれずみの本、Feigeらの『Tattoo & Piercing』にもコンスタンティンが紹介されていた。写真の説明には「アメリカのいれずみの最高傑作、1827年生まれ、没年不詳」とあった。さては、このいれずみ男は我々が知らないだけで、世界中に名を馳せた人物だったのか。Feigeらの記述によれば、「彼はコンスタンティヌス船長あるいは王子、さらに生きている美術館といわれた。1842年創設の世界最大のサーカス<アメリカ博物館>のいれずみの最高の出し物であった。歴史家たちは19世紀の最も有名な、最も素晴らしい、そして最も秘密に満ちた<いれずみ男>であったとしている。彼の身体全体の皮膚には、388個のいれずみが左右対称に互いに絡み合って描かれている。そこには王冠を戴くスフィンクス・竜・蛇・猿・象・レパード・虎・ライオン・パンサー・カモシカ・猫・ワニ・トカゲ・ワシ・こうのとり・白鳥・孔雀・ふくろう・魚・いもり、さらに男女・果物・葉・花が見られる。それらは、胸に50、左腕に51、右腕50、背中37、首8、腰に52、そしてペニスに1個、脚に137さらに額に2個が描かれている」

そしてベルリン人類学協会は「このいれずみをしたアルバニア男は中背で、すばらしく力強

い体格で、栄養状態良好で、顔色黒く、髭を生やし、髪を編んでいる。それにもまして素晴らしいのは、いたる所にいれずみがある。それは美しい模様のトリコットである。このいれずみ、毎日3時間かけて3カ月かかったらしいが、それはまさに芸術品で、裸になると素晴らしいショールをぴったり纏った人間である。いれずみは鼻、ペニスの裏面、それと踵を残して全身に及んでいる。色調の大部分は黒味がかった青で、一部は赤い。ある部分、特に手のひらでは文字もかなり見られる。彼の皮膚は柔らかく、手入れの行き届いた女の肌の感触を示す」と記した。また、カポシ自身も、「ウィーン医学週刊誌」に「ビルマのいれずみ男」と題した論文を投稿した。その内容は「この件は医学より、むしろ民俗学、言語学、曲芸の教材となる。考古学も加えられよう。それらの専門家が解剖学者、動物学者、皮膚科医あるいは外科医と一緒に委員会を構成し、この男の皮膚を特別研究の対象とすることが望ましい」と興味津々である。さらに続けて「全く例のないこのようなものは学問的に永久に保存されるべきで、可能な限り詳細に記述しなければ、この男が消え去ってしまう」とも述べている。

そういう訳で、このいれずみ男を、ウィーン大学の皮膚科で皮膚病患者を描いていたイラストレーターのHeitzmannが描いたのであろう。その絵はまことに緻密で、いれずみの一つ一つを丁寧に書き込んでいる。コンスタンティンはビルマでいれずみされたらしく、「ビルマのいれずみ男」として知られるようになったが、カポシの心配が当たり、コンスタンティンは、アメリカのサーカスなどでの見世物となった。彼のサーカスでの週給は1,000ドル以上だったらしい。それにしても、どうしてコンスタンティンがいれずみをしたのか。彼の存命中きちんとは明らかにされなかったが、彼は南の海でとらわれの身となり、土地の王女と結婚した。儀式としてのいれずみの苦しみを味わい、やがてアジア、アフリカ、そしてヨーロッパに逃げた等々が話としてある。

ところで、コンスタンティンを描いたHeitzmannは1836年、クロアチアで生まれた。ウィーンの総合病院で働き、Anton Elfingerとともに*Hebra*の"*Atlas of Skin Diseases*"のイラストを担当した。彼は医師であり、そしてイラストレーターであった。このアトラスは1856～1876年の間に発刊されたが、そのうちの1872年のアトラスにいれずみのコンスタンティンがある。そして、さらに弟子のカポシが編纂した、前述のアトラスをも飾ることとなった。興味あることに、コンスタンティンとのかかわりは不明であるが、Heitzmannも後にアメリカで活躍した。なお、コンスタンティンほど有名ではないが、Jean Baptiste Cabri、そしてJohn Rutherfordという船乗りが、コンスタンティンのいれずみ男の先輩として記録されている。Cabriはフランス人で、捕鯨船がポリネシアの東部で難破、島民に助けられ、いれずみし酋長の娘と結婚した。ヨーロッパの探検隊に周辺の島を案内中、嵐に遭遇し、島に戻れなくなりヨーロッパに帰った。全身にいれずみをした最初の男としてショーに出演した。また、Rutherfordはイギリスの船乗りで、1816年ニュージーランドに向かう途中、マオリ族に捕らえられ、やはりいれずみをされた事件がある。彼は現地に溶け込み、やがて酋長の2人の娘と結婚した。1928年イギリスに帰還し、やはりショーなどに出演した。

本稿をKaposiのアトラスとの出会いを頂いた亡き尾上 薫先生に捧げる。また、忙しい中、ドイツ語訳をして下さった森 光昭熊本大学理事に深謝します。なお、この稿の多くをFeigeらの本（文献）に拠ったことを付記して感謝を表する。

（熊本保健科学大学・学長）

主要文献

1）小野友道責任編集：カポシ先生と皮膚病、Visual Dermatology 3；2004.
2）Hackstock I：Carl Heitzmann（1836-1896）：physician and illustrator, Int J Dermatol, 37；235, 1998.
3）Feige M.&Krause B.：Tattoo-&Piercing-Lexinton, Kult und Kultur der Körperkunst Zweite, erweiterte Auflage, Schwarzkopf & Schwarzkopf, 2004.